

# 或る天才詩人の短くも美しき一生

河田誠一、または結核と戦争の時代における青春展



短くも美しき一生

The Brief but Beautiful  
Life of a Genius Poet



会期 2023.3.23(木) → 4.28(金) 原則日曜閉室

開室時間 10:00~18:00  
・次の日曜日は開室します:3/26、4/2  
・次の3日間は17時閉室です:3/25、3/26、4/2  
※入場無料。図書館入館資格のない方でもご覧いただけます。

【場所】早稲田大学総合学術情報センター2階展示室  
【主催】早稲田大学図書館

# 河田誠一略年表

## 河田誠一とは

河田誠一という詩人を知っている人は、多くないと思います。一九一一年に香川県三豊郡の仁尾町というところに生まれ、後に早稲田大学の第二高等学院（予科）で学びました。この展示をご覧になっている皆様が本学にご所属されているなら、先輩にあたる人です。田村泰次郎や井上友一郎、坂口安吾など、今はあまり読まれなくなっただけかもしれませんが、戦後に活躍した作家たちと、戦前、青春時代を共に過ごしました。「愛誦」という雑誌に多くの詩を発表し、時に天才とまで認められながらも、結核に倒れ、一九三四年、二十二歳で夭折してしまいました。

河田の遺稿は、一番の親友だった田村が引き受け、井上や、詩人の草野心平が編集し「河田誠一詩集」として出版されます。一九四〇年のことで、これが、河田の唯一の刊行詩集です。編纂の過程において、すでに応召していた田村は、まだ在京だった井上と手紙でやりとりしました。その後、田村や井上たちは時代の奔流に飲み込まれてゆきます。この詩集は、河田の詩作の成果であり、同時に、結核や戦争に断ち切られてしまった、ある若者たちの青春の、一つの記念碑、と言うことができます。

今回の展示では、河田や仲間たちの遺稿類や、同じ頃に文学を志していた若者たちの資料を出展しました。河田たちの生きた時代と現代とを安易に重ねることは、できません。しかし、今回の展示資料を前にすると、まだ名の売れぬ若者たちが、先行きが極めて不透明な中で、情熱をもって、自分たちの活動に打ち込んでいたことが、よく分かります。やりたいことをやる時、時流は、あまり関係がないのかもしれませんが、期せずして、卒・入学式の時期となりましたが、皆様が、本展から、自身の道を行く勇気を少しでも得てもらえれば、幸いに存じます。

早稲田大学図書館



### 世の中の出来事

辛亥革命（一九一〇）

明治天皇大喪（一九一三）

第一次世界大戦勃発（一九一四）

対華二十一カ条要求提出（一九一五）

ロシア革命（一九一七）

米騒動（一九一八）

パリ講和会議開催、ヴェルサイユ条約締結（一九一九）

国際連盟発足（一九二〇）

ワシントン会議開催（一九二二）

関東大震災（一九二三）

十一月二十三日、香川県三豊郡仁尾町中津賀に生まれる。海に近い土地で、生涯、彼の詩のモチーフとなった。四人兄弟の次男で、生まれてすぐに叔母の家に預けられ、五歳頃、実家に戻る。実家は商店を営んでおり、河田が九歳の時に父が亡くなると、母が切り盛りするようになる。河田も帳場に出ることがあった。従妹であり、生涯のミューズとなる海本清子が、しばしば家に入ります。

一月一日、元旦から自身の同人誌の原紙を切る。他の文芸誌から執筆の声がかかることもあり、上京前から、文学にまみれた生活を送っていた。三月、「悲恋」（短歌四首）が『愛誦』に初掲載。『愛誦』は、本学文学部教授だった西条八十主宰の雑誌。以降、二十歳まで寄稿が続く。

早稲田大学第二高等学院（予科）に合格し、上京。同級生の田村泰次郎と邂逅。以降、交流を深める。田村は、河田との出会いを次のように振り返っている。

まもなく、私は一人の体格の貧弱な、度の強い眼鏡をかけた男と知りあった。（…）毎月、「愛誦」を見せてくれるのであるが、だんだん、目次面の河田誠一という活字が大きくなり、それと同時に本文の、いまままで三段に組んであった彼の詩が、しまいには一段で大きく組まれるようになった。（…）私は彼の豊かな才能にあふれた詩に接して、一目も二目も

1929

18歳

1927

16歳

1911

少年期

1940 1934 1933 1932 1931 1930

没後

23歳  
(誕生日前に逝去)

22歳

21歳

20歳

19歳

おいた。それにこれは、後のことになるが、私たちの最初の同人誌「東京派」を一しよにやるようになって、印刷屋との交渉、原稿の割付、校正、広告の獲得に、もの馴れた水際だった手腕を発揮した。

——『わが文壇青春記』(新潮社)

チボー家の訳出他で知られる山内義雄の授業でモーパッサンの短編に触れ、小説も書くようになる。

高等学院を落第。春頃、四国を放浪する。この時、一説によれば『河田誠一詩集』の元となった「放浪詩篇」と題されたノートが執筆される。また、分量にして二百枚の「四国一周旅行」が「大阪化粧品商報」に掲載されたとも言われるが、詳細は不明である。十二月、再上京。田村たちと「東京派」を創刊。この年も「愛語」に多くの詩を発表。これまでは素朴で瑞々しい詩が多かったが、隠喩や象徴を用い、幻想的な雰囲気を含えた作風に変質してゆく。

生前、河田が詩を発表した最後の年。春、兄・義春の法事のために帰郷。その後、清子と共に東京に戻る。以降は、主に清子が働き、河田の生活を支えた。赤貧だった。『東京派』が二六号まで出て、廃刊。『東京派』には、詩ではなく、主に小説や評論、翻訳を発表した。

加宮貴一の『今日の文学』や中河与一の『新科学的文芸』に小説や評論を掲載。

田村、井上、坂口らと同人誌『桜』を創刊。本郷にあった中西書房という出版社がスポンサーとなり、同人誌としては鳴物入りだった。戦後、重要な作家を多く輩出する『文芸首都』に小説を掲載。六月、体調を崩す。七月、咳がひどくなり、しかし母と清子の関係を慮って実家には戻れず、何とかしのぐ。八月、母に手紙を書き、医者代を無心する。「もう、手紙も書けるやうになりました」と始まるが、結局、恢復せず、帰郷。

一月三日、高松赤十字病院で咯血。同月二十八日、仁尾の実家ではなく、高松市塩上の家に移される。清子が看病にあたる。二月三日、命日となる日は体調が良く、昼食に鮎の刺身や焼き鰯を摂る。午後四時頃、今川焼が食べたいと清子に伝え、清子を買ってくる、蒲団の上で亡くなっていた。口から血が垂れ、赤い塵紙が転がっていた。満で二十二歳。その後、二月十日、田村が河田家を弔問。夜、河田の遺稿を整理。四月、『桜』河田誠一追悼号が刊行。多くの友人たちが追悼文を寄せる。同誌同号他に遺稿詩が掲載。

九月、遺稿詩をまとめた『河田誠一詩集』が昭森社より刊行。

第二次護憲運動(一九二四)

日ソ基本条約締結、

治安維持法制定、

普通選挙法制定(一九二五)

大正天皇大喪、

金融恐慌、

山東出兵(一九二七)

張作霖爆殺事件、

パリ不戦条約締結(一九二八)

世界恐慌(一九二九)

ロンドン海軍軍縮条約締結(一九三〇)

満洲事变勃発(一九三二)

満州国建国宣言、

五・一五事件(一九三三)

国際連盟脱退、

防空大演習実施、

ナチス政権発足(一九三三)

出版法改正(一九三四)

天皇機関説事件、

国体明徴声明(一九三五)

二・二六事件、

日独防共協定締結(一九三六)

日中戦争開始(一九三七)

国家総動員法制定(一九三八)

国民徴用令制定、

第二次世界大戦勃発(一九三九)

日独伊三国同盟締結、

大政翼賛会結成(一九四〇)

ハワイ真珠湾攻撃、

太平洋戦争開戦(一九四二)

文科系学生の徴兵猶予停止、

学徒出陣(一九四三)

サイパン島陥落、

本土爆撃本格化(一九四四)

広島・長崎に原子爆弾投下、

ポツダム宣言受諾(一九四五)

(一) 生前

一九二六年 (大正十五・昭和元) 十五歳

- \*《短歌二十首》『夢が血の歌』『巨艦』第22号 (十二月)
- \*《短歌十一首》『作品名なし』『巨艦』第22号 (十二月)
- \*《作文》『故郷平石に遊ぶ』『巨艦』第22号 (十二月)
- \*《小説》『漁村』※『月河集』二名義 (掲載誌、発行年月不明)
- \*《戯曲》『深山与七郎 (第一部)』※『月河集』二名義 (掲載誌、発行年月不明)
- \*《詩》『夏の夜の星空』※『月河集』二名義 (掲載誌、発行年月不明)

一九二七年 (昭和二) 十六歳

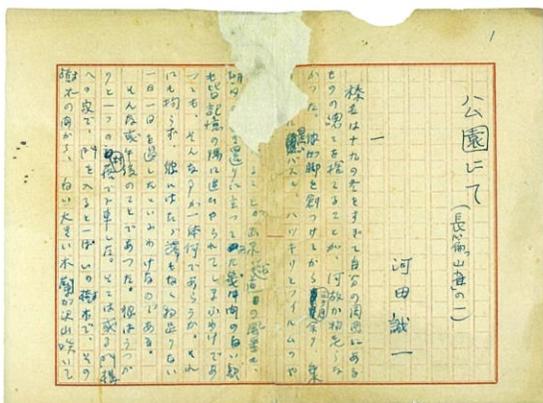
- 《短歌四首》『悲恋』『愛誦』二卷三号 (三月) 63頁
- 《詩 (小曲)》『春宵の風』『愛誦』二卷五号・第13号 (五月) 81、82頁
- \*《小説》『恋を求むるもの』『四国文学』創刊号 (五月) ※『沙々波晚太』名義
- \*《不明》『死』『四国文学』創刊号 (五月)
- \*《短歌》『愁春秘篇』『四国文学』創刊号 (五月)
- 《詩 (小曲)》『初夏のうれひ』『愛誦』二卷九号・第17号 (九月) 38頁
- 《詩 (小曲)》『若き日』『愛誦』二卷九号・第17号 (九月) 83、84頁
- 《詩 (小曲)》『南のくに』『愛誦』二卷十号・第18号 (十月) 84頁

一九二八年 (昭和三) 十七歳

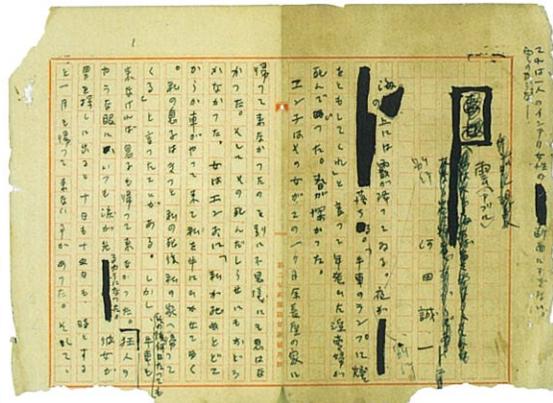
- \*《花月草紙》の解釈文 (作品名未詳) 『巨艦』第23号 (二月)
- \*《短歌八首》 (作品名未詳) 『巨艦』第23号 (二月)
- \*《詩》『高原の息』『巨艦』第23号 (一月)
- \*《詩》『日本の笛』『巨艦』第23号 (一月)
- \*《詩》『去年の落葉』『巨艦』第23号 (一月)
- 《詩》『青い空』『愛誦』三卷一号・第21号 (二月) 68頁
- 《詩》『海辺の断章』『愛誦』三卷三号・第23号 (三月) 79頁
- 《詩》『生存の灯影』『愛誦』三卷四号・第24号 (四月) 84、85頁
- 《詩 (小曲)》『病床月前の賦』『愛誦』三卷八号・第28号 (八月) 86頁
- 《詩 (童謡)》『オコン山』『愛誦』三卷八号・第28号 (八月) 91頁
- 《詩 (小曲)》『満潮』『愛誦』三卷九号・第29号 (九月) 85頁 ※著者名「河田誠」と誤記
- 《詩 (民謡)》『黒瞳』『愛誦』三卷十号・第30号 (十月) 97頁
- 《詩 (民謡)》『リンデンの花』『愛誦』三卷十一号・第31号 (十一月) 99、100頁

一九一九年 (昭和四) 十八歳

- \*《作文》『秋思』『巨艦』第24号 (発行年月不明)
- 《詩》『秋かぜの賦』『愛誦』四卷一号・第33号 (二月) 96、97頁
- 《詩》『生きてゆくといふトンネル』『愛誦』四卷一号・第34号 (二月)



公園にて (長篇「山雀」の一)



雲 (アプル)

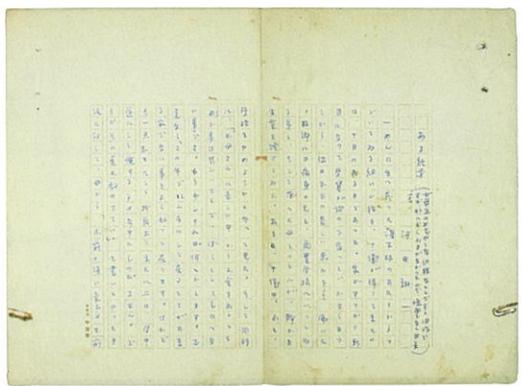
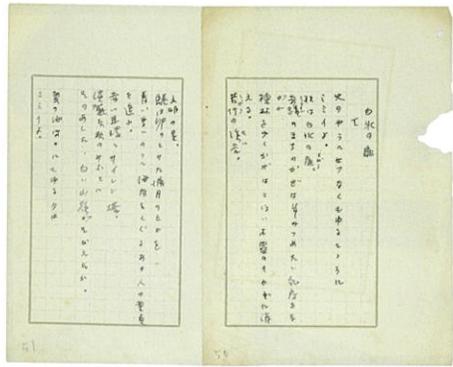
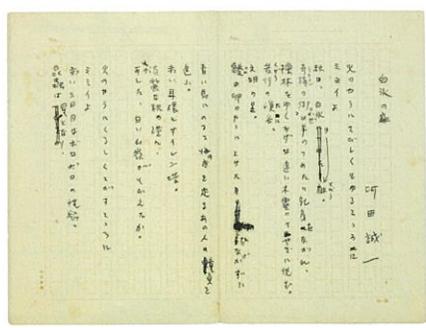
『詩』「月光の中に」『愛誦』四卷三号・第35号(三月) 73〜74頁  
 『詩』「ある印象」『愛誦』四卷五号・第37号(五月) 75頁  
 『詩』「サンパンの春」『愛誦』四卷六号・第38号(六月) 71〜72頁  
 『小説』「坂(一名、るい子の事)」『羅女奈土』巻号不明(六月) 33〜53頁 ※当館調査で作品名が判明した。三重県立図書館田村泰次郎文庫所蔵。  
 『詩』「春の港」『愛誦』四卷七号・第39号(七月) 44頁  
 『詩』「海辺の町」『愛誦』四卷九号・第41号(九月) 44〜45頁  
 『詩』「海浜牧歌——わが海辺の詩の五——」『愛誦』四卷十一号・第43号(十一月) 42〜43頁

一九三〇年 昭和五 十九歳

『詩』「亡春の歌」『愛誦』五卷一号・第45号(二月) 43頁  
 『詩』「航海」『愛誦』五卷二号・第46号(二月) 81〜82頁  
 『その他』「私信」『愛誦』五卷三号・第47号(三月) 42頁  
 『詩』「白木の扉」『愛誦』五卷三号・第47号(三月) 55頁  
 『詩』「亡春——その五——」『愛誦』五卷四号・第48号(四月) 61頁  
 『詩』「春」『愛誦』五卷四号・第48号(四月) 61頁  
 『詩』「映像(いまあじゆ)」『愛誦』五卷五号・第49号(五月) 44〜45頁  
 『短評』「私の月評」『愛誦』五卷五号・第49号(五月) 71頁  
 『不明』「四国一周旅行」「大阪化粧品商報」巻号不明(年月不明)  
 『詩』「雨——早大仏文科ラメナド同人への訣別——」『愛誦』五卷六号・第50号(六月) 38頁  
 『詩』「火籠——自殺に就ての三——」『愛誦』五卷七号・第51号(七月) 66頁  
 『短評』「泥人形を抱く——没落末期現象其他——」『愛誦』五卷八号・第52号(八月) 50〜51頁  
 『詩』「凱風快晴」『愛誦』五卷八号・第52号(八月) 72〜73頁  
 『短評』「詩壇時評 むづがゆき感情」『愛誦』五卷九号・第53号(九月) 44〜45頁  
 『詩』「色情哀史——放浪詩篇の七——」『愛誦』五卷九号・第53号(九月) 75〜76頁  
 『評論』「室生犀星論(上)」『愛誦』五卷九号・第53号(九月) 80〜83頁  
 『評論』「室生犀星論(下)」『愛誦』五卷十号・第54号(十月) 29〜33頁  
 『詩』「日本悲歌——夏果——」『愛誦』五卷十号・第54号(十月) 78〜79頁  
 『短評』「詩壇時評」『愛誦』五卷十一号・第55号(十一月) 42〜43頁  
 『詩』「本牧以来——ポエジイ・ド・ロマン——」『愛誦』五卷十一号・第55号(十一月) 51〜52頁  
 『評論』「詩の「分化」、其他二三の問題——新らしき詩の方向——」『愛誦』五卷十二号・第56号(十二月) 68〜69頁  
 『詩』「柩船(ひつぎぶね) 詩篇抄」『愛誦』五卷十二号・第56号(十二月) 68〜69頁  
 『小説』「日本悲歌」『東京派』創刊号(十二月) 18〜31頁  
 『翻訳』「ヴィヌスの墓(レエモン・ラヂゲ)」『東京派』創刊号(十二月) 79頁  
 『翻訳』「停止(レエモン・ラヂゲ)」『東京派』創刊号(十二月) 79頁

一九三二年 昭和六 二十歳

『評論』「石川啄木論」『愛誦』六卷一号・第57号(二月) 54〜57頁  
 『詩』「流木」『愛誦』六卷一号・第57号(二月) 86〜87頁  
 『小説』「海豚の花」『東京派』二号(一月) 43〜51頁  
 『その他』「東京派の馬鹿」『東京派』二号(一月) 57頁  
 『評論』「石川啄木論」『愛誦』六卷二号・第58号(二月) 23〜27頁  
 『創作』「妻を捨てる日」『大阪化粧品商報』巻号不明(二月)  
 『詩』「早春」『新月』巻号不明(二月)  
 『翻訳』「マルタの想苑(ナ・リイヴィス)」『東行』一号(発行年月不明)  
 『詩』「風」『愛誦』六卷三号・第59号(三月) 28〜29頁  
 『詩』「恐ろしき花」『愛誦』六卷四号・第60号(四月) 72〜73頁  
 『小説』「花と金錠」『今日の文学』一卷四号(四月) 30〜36頁



白木の扉

ある終焉

《評論》「横光利一序説——l'honneur à une femme——」『東京派』三号（四月）89～92頁  
 《小説》「印度フレハの夏」『東京派』三号（四月）28～41頁  
 《翻訳》「アドリアンヌ・メジュラ（ジュリアン・グリーン）」『東京派』三号（四月）65頁  
 《小説（トント）》「樺——TSUBAKI——」『愛誦』六卷五号・第六号（五月）78～77頁  
 《小説》「AMAZON——一名・熱病夜話——」『東京派』四号（六月）5～10頁  
 《詩》「アラビヤ夜話——青春否定の詩——」『愛誦』六卷六号・第六号（六月）78～79頁  
 \*《評論》「新文学について」『今日の文学』巻号不明（六月）  
 《詩》「悪の門」『愛誦』六卷七号・第63号（七月）73～74頁  
 《翻訳》「伝説（ユウジェン・ジョラス）」『東京派』五号（八月）82～92頁  
 《小説》「野獣」『東京派』五号（八月）46～51頁  
 《評論》「新進作家の作品——主として一九三二上半年期の同人雑誌による——」『今日の文学』一卷九号（九月）50～53、77頁  
 《詩》「白色病院——ある青年の遺稿——」『愛誦』六卷十号・第66号（十月）76～77頁  
 《小説》「スマイルン」『東京派』六号（十一月）6～9頁  
 《評論》「谷崎潤一郎」『新科学的文芸』二卷十二号（十二月）52～54頁

一九三三年（昭和七） 二十一歳

\*《小説》「緞帳」『青猫』巻号不明（一月）  
 \*《小説》「椿姫」『今日の文学』巻号不明（二月）  
 \*《評論》「井上友一郎論——今日の文学」巻号不明（二月）  
 《小説》「海薔薇」『新科学的文芸』三卷三号（三月）13～24頁  
 《小説》「浪の雪」『又ウヴェル』第一号（九月）183～190頁  
 《評論》「矛と盾など」『今日の文学』二卷十一号（十一月）19～21頁  
 《再録》《小説》「浪の雪」『小説・エッセイ』（朝日書房 一九三二年十二月）183～190頁

一九三三年（昭和八） 二十二歳

《童話》「海辺の話」『時事新報』一七八七〇号（三月五日）10頁  
 《小説（コント）》「人魚に惚れる」『モダン日本』四卷二号（二月）70頁  
 《小説》「真夏の蘭」『桜』一卷一号（五月）49～62頁  
 《座談会》「文学の精神を語る座談会（井上友一郎・大島敬司・河田誠一・坂口安吾・田村泰次郎・堀寿子・真杉静枝・矢田津世子）」『桜』一卷一号（五月）160～172頁  
 《小説》「古見の男の話」『文芸首都』四月号（四月）47～65頁  
 《小説》「無花果」『桜』一卷二号（七月）120～122頁

一九三四年（昭和九） 二十三歳

《その他》「消息二つ」『桜』二卷一号（二月）140頁

(二) 没後

一九三四年（昭和九）

《小説》「新城様名の手記（遺稿）」『桜』二卷三号（四月）8～27頁 ※末尾に「長編「山雀」の内より」  
 《詩》「アラビヤ」『桜』二卷三号（四月）94～95頁  
 《詩》「悲惨の港」『桜』二卷三号（四月）95～96頁  
 《詩》「海洋詩篇（遺稿）」『翰林』二卷四号（四月）88～89頁  
 《詩》「一夜（遺稿）」『桜』二卷四号（七月）90～91頁

一九三六年（昭和十）

《詩》「残雪（遺稿）」『歷程』四号（一〇月）



一九四〇年(昭和十五年)

- 〔再録〕《詩》「春」『河田誠一詩集』(昭森社 一九四〇年) 7頁※未発表詩稿「夏の終り」所収(以下「夏」)
- 《詩》「暗礁」『河田誠一詩集』(昭森社 一九四〇年) 8頁
- 《詩》「化石」『河田誠一詩集』(昭森社 一九四〇年) 9頁※「夏」
- 《詩》「江戸菊」『河田誠一詩集』(昭森社 一九四〇年) 10頁
- 《詩》「ある希望」『河田誠一詩集』(昭森社 一九四〇年) 11頁※「夏」
- 《詩》「遊心」『河田誠一詩集』(昭森社 一九四〇年) 12頁
- 《詩》「つめたき人々」『河田誠一詩集』(昭森社 一九四〇年) 14頁
- 《詩》「短唱」『河田誠一詩集』(昭森社 一九四〇年) 16頁
- 《詩》「オイ」『河田誠一詩集』(昭森社 一九四〇年) 18頁
- 《詩》「過ぎゆく日」『河田誠一詩集』(昭森社 一九四〇年) 20頁
- 《詩》「雨天の」『河田誠一詩集』(昭森社 一九四〇年) 22頁
- 《詩》「鼻血」『河田誠一詩集』(昭森社 一九四〇年) 24頁
- 《詩》「さくら花」1 『河田誠一詩集』(昭森社 一九四〇年) 26頁
- 《詩》「さくら花」2 『河田誠一詩集』(昭森社 一九四〇年) 28頁
- 〔再録〕《詩》「残雪」『河田誠一詩集』(昭森社 一九四〇年) 30頁
- 《詩》「燃ゆる村落 放浪詩篇その二」『河田誠一詩集』(昭森社 一九四〇年) 32頁
- 《詩》「風塵の故郷 放浪詩篇その二」『河田誠一詩集』(昭森社 一九四〇年) 34頁
- 《詩》「哭く」『河田誠一詩集』(昭森社 一九四〇年) 37頁
- 《詩》「南方哀別日」『河田誠一詩集』(昭森社 一九四〇年) 40頁
- 〔再録〕《詩》「春の港」『河田誠一詩集』(昭森社 一九四〇年) 44頁
- 《詩》「炎天」『河田誠一詩集』(昭森社 一九四〇年) 46頁
- 《詩》「悲慘の港」『河田誠一詩集』(昭森社 一九四〇年) 49頁

一九七一年(昭和四十六)

- 〔再録〕《座談会》「文学の精神を語る(井上友一郎・大島敬司・河田誠一・坂口安吾・田村泰次郎・堀寿子・真杉静枝・矢田津世子)」『定本坂口安吾全集 第二二巻』(冬樹社 一九七一年) 9頁

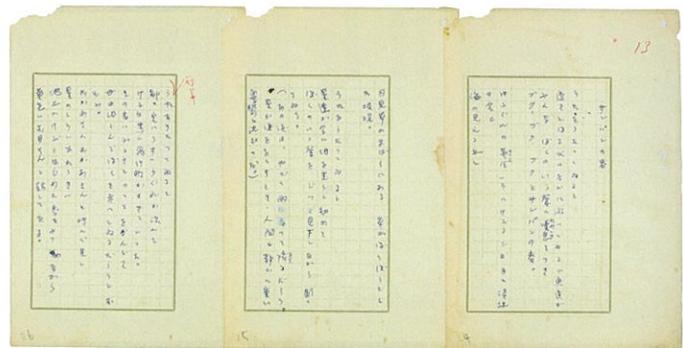
一九九四年(平成六)

- 〔再録〕《詩》「春の港」『ふるさと文学館 第四三巻 香川』(ぎょうせい 一九九四年) 606頁
- 〔再録〕《詩》「春」『ふるさと文学館 第四三巻 香川』(ぎょうせい 一九九四年) 606頁
- 〔再録〕《詩》「短唱」『ふるさと文学館 第四三巻 香川』(ぎょうせい 一九九四年) 607頁

一九九九年(平成十)

- 〔再録〕《座談会》「文学の精神を語る(井上友一郎・大島敬司・河田誠一・坂口安吾・田村泰次郎・堀寿子・真杉静枝・矢田津世子)」『坂口安吾全集17』(筑摩書房 一九九九年) 5頁

参考文献・桑垣孝平・長谷川敦史「河田誠一の詩と生涯、及びその詩集成立と遺稿類について」付『東京派』総目次・「河田誠一詩集」全文」『早稲田大学図書館紀要』六九号、二〇二三年三月、32頁



サンパンの春

河田の詩のモチーフとしてたびたび詩に登場する、  
故郷・香川県三豊郡仁尾町（現・三豊市）の海



# 或る天才詩人の短くも美しき一生

——河田誠一、または結核と戦争の時代における青春展——

【主催】早稲田大学図書館

【発行日】2023年3月23日